

纂所)、服部敬氏(花園大学)、小田康徳氏(大阪電気通信大学)らが、近世から近代にかけて、西淀川区が農村から都市へ変貌していく歴史的過程を報告。続いて塚口アキエさん・北村ヨシエさん(西淀川公害患者と家族の会)、津留崎直美氏(西淀川公害訴訟弁護

団)らが公害の経験や裁判について報告した。西淀川では、今後も住民による地域再生の取り組みが続く。これに対して、史料ネットをはじめとする歴史学の側からの継続的な連携・協力が求められていると言えよう。

(文責・片岡法子)

- φ - φ - φ - φ - φ - φ - φ - φ -

## ■史料ネットに寄せられた声から...

☆前回の第8号に引き続き、史料ネットに寄せられたご意見をご紹介します。

★今後も、史料ネットの活動に関するご意見・感想を募集します。投稿原稿をお寄せください。

### 日本史研究会大会特設部会の感想 しらかさわかさのこ 白木沢旭児(北海道大学文学部)

史料ネットの活動と歴史学に対するいくつかの問題提起について私見を述べることにしたい。

歴史研究者と市民との間に「史料」に対する大きな認識のギャップがあることが指摘された。またそれを埋める方策として「現地説明会」、市民とのネットワークの強化、さらには現地利用主義が提唱された。私は現在、新札幌市史編集員として戦後編の編さんに直面しているので、興味深く聞くことができた。戦後編では執筆者の大幅な補強、さまざまな規模の聞き取り調査の実施、期限による破棄を待つ膨大な市資料保存センター所蔵行政文書の利用・保存など課せられた課題は多く、史料ネットの経験をふまえた、市民に根ざした史料保存・利用という問題提起は、一つの明確な方向性を示したものとして学ぶところが大きかった。

ただ、問題は市史編さんという必要に迫られて初めて地域社会と史料の問題が生じてくるのであって、歴史研究自体が地域史料を必要としているわけでは必ずしもない、ということである。大会時の討論でも報告者と質問者がかみ合わないと感じたのはこのためである。また、歴史学それ自体が市民の歴史認識とは離れて成り立っており、たまたま歴史研究者が史料として

認定したものが保存・利用の対象となる現在の状況は、現代史ではますます顕著になるだろう。

したがって、史料ネットの経験を普遍化するためには、それぞれの地域に地域史料を用いて地域史研究を日常的に行う主体が存在しなければならない。その主体は地元在住の歴史研究者(外国史や日本古代史専攻者なども含めた)なのだろうか。あるいはその地域に研究対象として興味を持つ(=フィールドとしている)遠隔地の歴史研究者なのだろうか。役所の自治体史編さんの部署あるいは公文書館・文書館職員なのだろうか。阪神地域ではここにあげたうち遠隔地の研究者を除いた人々が主たる担い手となっているようである。しかし、他の地域ではそれぞれの立場から地域史料の必要性をばらばらに認識しているのが現状であり、地域史料を探求する主体がそもそも存在しないのではないだろうか。

今後、ぜひ知りたいことは、阪神地域におけるネットワークの核となった主体がなぜ形成されたか、ということである。震災というパニックの経験とさまざまなボランティア活動の刺激が決定的なのか、あるいは自治体史、地元在住歴史研究者などのこれまでの仕事の蓄積があったのか、ということである。私は、やはり地域史研究の蓄積の多さが決定的だったのではないかと考えている。とにかく地元を顧みながら考えさせられることが多かった大会であった。

- φ - φ - φ - φ - φ - φ - φ - φ -

## ■文南大竹青幸辰

大阪府 『平成7年1月17日 阪神・淡路大震災の記録』 1997年1月

東京国立文化財研究所 『美術工芸品の防災に関する調査研究』 1997年3月

(前号で紹介した文書等所蔵施設被害調査報告を収録した、文化庁による科学研究の報告書)